

## ヘレニズム文化とキリスト教

95E028 石原 大

### 序論

私がなぜこのテーマを選んだかと言うとはじめ私は言語学については、意味論という立場から見てきたが言語が人々に与える文化的な影響について興味を抱き常に言語と文化を結びつけてこの1年間は学んできた。そしてこの「ヘレニズム文化とキリスト教」をレポートのテーマとして選ぶとした理由として私は旧約聖書の「バベルの塔」について調べたときに、キリスト教はどのようにして興ったのだろうかと言う疑問を抱き、ただキリスト教の発生を調べるのではおもしろくないと思い、宗教という観点だけでなく、歴史、民族、言語という観点からも研究してみようと思いこの「ヘレニズム文化とキリスト教を論文のテーマにしたのである。この4つの観点を中心としてキリスト教というものを見ていきたい<sup>(1)</sup>。

### I. 後1世紀のパレスチナの言語

#### 1. アラム語と旧約聖書との関係について

キリスト教発生時のパレスチナの言語はアラム語でありそれ以外にヘブライ、ギリシャラテン語が存在していた。そしてユダヤ民族の言語は途中、ヘブライ語からアラム語に変わった。しかし民族としての強固な独自性を持ち政治的にも中立の立場をとり言語については自分たちの民族の伝統的言語であるヘブライ語を使わなくなり、アラム語を日常語としていた。アラム語は前8世紀パレスチナに浸透、前2世紀には、ユダヤ住民の主な日常語になっている。アラム語は旧約聖書の中にまで入りこんでおり、例えば旧約聖書のなかのダニエル書（前2世紀半ば）の一部は、アラム語で書かれている。

#### 2. パレスチナとアラム語の関係について

アラム人は、古代メソポタミヤからシリア、ダマスコに広がっていった民族である。アラム語はその当時オリエント全体の広域共通語として広まっていた。ユダヤ民族がアッシリアの支配下におかれていた時、アッシリアが多くの国を治めるにあたり「共通語」が必要であった。アッシリアの支配にあった時もアラム語は多く入り込んだが、その時ユダヤ人にとっては外国語として存在し、公用語ではなかった。しかしアッシリアの支配後そしてバビロニア人の支配の後、アラム語はユダヤ人の第一言語になった。それはアラム語の文字の力が大変影響しており、ヘブライ文字より簡易なアラム文字を自分たちの言語として取り込んだからである。

#### 3. オリエント世界におけるアラム語の位置について

アッシリア、バビロニアの支配のあと、長くペルシャ支配が続いたが、この時期にオリエントでアラム語の普及がさらに促進されたと見てよい。これは、アラム語が普及した地域の民族はほぼセム語系の民族であったため、ペルシャ支配がオリエント諸民族間の流通をよくした結

果、彼らの間で広域共通語としてのアラム語が普及しやすかったからである。その後パレスチナのユダヤ人はローマ支配の時に政治的な独立は失ったけれども、ギリシャ語は使用せず、アラム語を使い続けた。しかしやがてこの地域に、アラブ支配が確立すると、長い歴史の間に徐々に言語もアラブ語に変わっていった。

#### 4. ヘブライ語とアラム語の関係について

##### (a) ヘブライ語〔キリスト教発生後〕

本来のユダヤ人の言語であるヘブライ語とはいったい何であろうか？まず1世紀パレスチナではヘブライ語は文章語としてのみ存在した。そして上位の支配の言語としてギリシャ語が存在し、少なくとも旧約聖書はヘブライ語で読まれていたし、原則としてその解説の枠内にとどまるユダヤ教の宗教文章の大部分もヘブライ語で書かれ続けた。そして時代が進んでパレスチナのユダヤ人が非ユダヤ化していくと共にアラム語はユダヤ人の言語としてすたれていったがパレスチナの外に出ていったユダヤ人は日常生活はそれぞれの周辺世界の言語で営みつつ、自分たちの独自の宗教的文章語としてはヘブライ語を保存し続けたのである。

##### (b) 死海写本とヘブライ語

死海のはとりのクムランという場所でエッセネ派の一部が同信の仲間だけが集まって集団生活をしていた場所の近くの洞窟で、第二次世界大戦後になって多数の写本が発見された。これはイエス時代と同じ時期の写本であり、大変古いものでありそれ以上に言語的にももしろい発見がある。

##### 1. 旧約の写本はヘブライ語

##### 2. エッセネ派が独自に書いた文章もほぼすべてヘブライ語

##### 3. 一部アラム語も見つかった〔ほんの一部〕

ここで重要なことは、宗教文章はヘブライ語が使用されている点である。

##### (c) 日常生活とアラム語の関係について

この事実は、ヘブライ語がアラム語より重要な位置を占めていたような印象を与える。しかし次の項目で説明する新約聖書の事例はいかにアラム語が当時のパレスチナで日常語となっていたかを説明する。シナゴグの礼拝で後2世紀にそのテキストが定着したミシュナ〔ユダヤ教ラビ達による律法解釈の伝承のうちの最も基本的な部分〕によれば礼拝により聖書が読み上げられるとき「〔律法の場合〕通訳に対して1節以上読んではいならない。預言者のばあいは3節以上読んではいならない」と示されている〔メギラ4、4〕。これは読み方の規定であり、一気にあまり長く読むと通訳がついていけなくなってしまうので、1文ずつ区切って読み上げ通訳させると言う方法をとったのである。そしてこの場合の通訳はもちろん「アラム語」である。ヘブライ語は神聖な言語であると同時に大変難しい言語なので一般人には理解できないため、アラム語で同時通訳する必要があったのである。このアラム語への通訳がミシュナに規則として書かれていると言うことは、礼拝におけるアラム語の導入が、すでにかなり以前から慣習となっていたことを示している。このように礼拝においてアラム語の通訳を必要としたと言うことは、当時のユダヤの民衆がいかにヘブライ語から離れ、日常生活をアラム語のみで暮らしていたかと言うことの決定的な証拠である。

## 5. 初期キリスト教におけるアラム語

イエスもヘブライ語は使用していたが彼にとって生活の言語はやはりアラム語であった。例えば彼の発言の中にはいくつものアラム語が伝えられている。

例 「タリタ、クミ」（「少女よ起き上がれ」）〔マルコ5、41〕

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」（「我が神、我が神、汝、我を見捨てたまいし」）〔マルコ15、33〕

これらはアラム語である。出発当時のパレスチナのキリスト教がアラム語を用いたことは、パウロの引用によってもわかる。

例 第一コリント16、22「マラナタ」（「主は来たり給う」）

礼拝の最後のところでみんなで声を揃えて唱えたセリフが上記のものであり、それがアラム語であったということは、日常生活も当然アラム語で営まれていたと考えられる。そしてパウロがコリントの教会に当てた手紙の中にアラム語を挿入させていることは大きな発見である。ギリシャ本土の中心地であったコリントでアラム語が一般に知られていたわけでない。しかもパウロはこの語をギリシャ語で説明せず、ギリシャ語のキリスト教会においても、礼拝に用いる重要な用語をアラム語のまま伝え、用いていたということである。〔これは雰囲気づくりのためでもあり、いまだにアラム語で「アーメン」を使い「そーでーす」や「異議ナシ」と言わないのは、そのためである。キリスト教らしい雰囲気を出すための演出〕。しかし最初期のパレスチナの教会では別であり、自分たちの日常語であり、彼らは本気で信じて、願って唱えていたのである。「主よ来たり給う」を本気になって主の来臨を願っていたのである。この場合の「主」は終末の時に審判者として再臨するキリストを意味している。そして大勢の信者が、「マラナタ」と本気で叫ぶので新興宗教の迫力があつた。しかしその言葉が広く広がってしまうと、単なる宗教儀礼としてたてまえてだけ信じられるようになるので迫力も失うけれども、発生期のパレスチナのキリスト教ではそれが本気で信じられていた。そして以上からわかるようにイエス当時のパレスチナではアラム語を日常言語としていたことがわかる。

## II. パレスチナにおける帝国支配の言語

1世紀パレスチナで用いられた言語はアラム語とヘブライ語の2つだけだったのでない。それに加えてギリシャ語とローマ支配の公用語たるラテン語が入ってくる。

### 1. 帝国の公用語、十字架の捨て札

イエスが十字架につけて殺されたときにその十字架のところに捨てふだが書かれていた〔ヨハネ19、19〕「罪状書き」で彼の場合、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書かれていた。ヨハネ福音書はかわった書物でその特徴として、イエスの事実を事実として正確に伝えようと言う意志はなく、ただただ独特の宗教思想を展開することに夢中になっているが、他の福音書と比べてやたら細かいところを正確に書きたがる特徴がある。最も重大なことよりも細かい事実こだわるのはヨハネ福音書に限ったことではなく、宗教的思想の大部分に共通する奇妙さ

である。もっと歴史の事実を正直に目を止めればいいのにと見える例は、古今東西の宗教的発言や議論にしばしば見受けられることがある。西ヨーロッパのキリスト教絵画では、十字架場面を書くとき必ず十字架の上部に打ち付けた板などに「INRI」と記入してある。IESUS, NAZARENUS, REX, IUDAEORUM〔ユダヤ人の王〕の略であり場面の背景や人物は、まるで中世西ヨーロッパの様子なのにこういう点だけは妙に正確に史実にこだわるのである。しかし、西欧絵画の伝統ではラテン語だけだがヨハネ福音書の記述で注目すべき点がある。この捨て札のセリフが「ヘブライ、ローマ、ギリシャ語」で書かれているのである。〔19、20〕ここで大事なのは、ギリシャ語で書かれているということである。

#### (a) イエス・キリストについて

彼は、おそらく紀元前4～8年頃にガリラヤの小村ナザレで生まれた<sup>(2)</sup>。彼の生まれた時代は、大変メシアニズムが強くなっていった<sup>(3)</sup>。これは、この世の終末の時にダビデ王の子孫からメシアが現れて、イスラエルを中心に神の国をもたらすというユダヤ教の信仰である<sup>(4)</sup>。キリスト教は、イエスの呼びかけに応じ、彼に従った人々が特にイエスの死後、彼をキリストと信じたことによって成立するのである<sup>(5)</sup>。キリストという言葉は、ヘブライ語のメシアのギリシャ語訳であり、「救世主」の意味である<sup>(6)</sup>。この時代の宗教思想として「律法」を守ることは大変重要であった。この「律法」とは神の祝福を得るための教えである。このような律法主義を実践するヨハネの呼びかけに応じて彼の元に参集した人々の中にイエスはいたのであった。当時この「律法主義」は、ファリサイ派やエッセネ派が、実践していた。なおヨハネは、エッセネ派と関係があったと思われる。しかしイエスはまもなくヨハネから独立し、ガリラヤ湖畔を中心に1人宣教活動を開始する。その際彼は、ヨハネの立場を批判的に継承したと見てよい。たとえば、ヨハネは、神の国の接近に基づいて人々に悔い改めを迫ったが、イエスは、神の国がすでにこの世の中に実現されつつあると告知したことなどが挙げられる。そしてイエスが起こしたとされる奇跡の物語についてだが、当時の文学形式の中で高められ、この物語は最終的に彼の超人的な力を誇示するために用いられたことは事実である。このことは、イエス自らが言わば病人や、障害者を看病することによって障害や病気をいやそうとした事実から当時これらの人々にとってイエスはまさに奇跡の人であっただろう。そして彼は、激しくユダヤ教の神殿に対して批判を加えた。結果、ローマのユダヤ総督ピラトにより政治的反逆者と認定されて十字架刑に処せられた。当時イエスは30才を超えたばかり、彼がヨハネから独立して公に行動した期間はわずか2年足らずであった<sup>(7)</sup>。

#### (b) ギリシャ語

イエスは死刑はローマ帝国の総督が決定して執行したのでその捨て札がラテン語で書かれても不思議ではないし、ローマ支配下の地元の住民に理解できるようにヘブライ語を用いたことも理解できる。しかし問題は支配の言語〔ラテン語〕でもなく、非支配の言語〔ヘブライ語〕でもないギリシャ語を加えたかということである。それはローマと言う大きな国をそして民族をまとめるために1つの広域公用語、つまりギリシャ語が必要であったのである。そして直接的な植民地支配が終わってもその言語が共通語としてもちいられ続ける。そして同じように、ヘレニズム支配が終わっても、東地中海世界ではギリシャ語支配は残ったのである。そしてギリシャ語の浸透度が高かったのは、ヘレニズム支配の期間が長かったことと、支配下の土地に

ヘレニズム都市を次々と作っていったためである。それにラテン語は、上層階級の言語で、しかもこれを理解するユダヤ人はほとんどいなかったので、ラテン語の他にギリシャ語が必要であったのである。

## 2. ヘレニズム都市における言語状況

パレスチナでギリシャ語を第1言語とする人々について2種類に分けられる。まず1つめは、ヘレニズム都市の存在でありその住民の多くはユダヤ人でなく、ギリシャ語を第1言語としていた。2つめは他地方のヘレニズム都市で生活していたユダヤ人がパレスチナに出てきて滞在している場合である。

## 3. ヘレニズム都市の構造について

紀元前4世紀、大帝と呼ばれたマケドニアのアレクサンドロスが小アジアからインダス川にいたる広大な世界を侵略し、ヘレニズム世界と呼ばれる世界支配を作る。そしてその後継者達は侵略した地域にそれぞれの支配の中心の都市を作ろうとした。その有名なものとしてはアンティオキアとアレクサンドリアがある。さらに、支配の頂点に位置する王朝だけでなく、侵略戦争を担った退役軍人〔ヴェテラン〕達も支配の分け前を受けるべくあちこちに都市を作った。これらのヘレニズム都市は外来の侵略者がその土地を支配する拠点として機能し、その都市を拠点として周囲の農業、牧畜地域を支配する形をとっている。アンティオキアやアレクサンドリアを作ったのは最上層の支配者であるが、侵略戦争を担ったヴェテランは大勢いたので、それに応じて大小様々な都市があちこちに作られていった。これらの都市に入ってくる人々は、下層労働者や、奴隷などである。これは都市の全体が人工的に外から注入されたことを意味する。そしてそれらの都市の住民達は、ヘレニズム都市といってもギリシャ民族の出身者とは限らない場合のほうが多い。そしてギリシャ人でない者もヘレニズム都市に入ることによりギリシャ化していった。あるいはギリシャ化した人々が都市を作ったといってもよい。そして沢山の人が入ってくるということは、共通語、つまりギリシャ語が必要であった。

その後ヘレニズム都市は、ローマ時代になってもパレスチナの中に作られた。これはローマ帝国の網の目のような支配機構を維持することが目的であったからである。

## 4. パレスチナのヘレニズム都市

主にヘレニズム都市は、地中海の東半分に数多く作られた。ここで典型的なパレスチナのヘレニズム都市である「スキュトポリス」、「サマリア」、「カイサリア」を事例として見てみよう。

### (a) スキュトポリスについて

この都市は、ヨルダン西岸、ガラリヤ南部の都市である。歴史は古くイスラエル人がパレスチナに住む以前からの先住民の町である。この町はヘレニズム時代には半独立の自由都市としてヘレニズム王朝に朝献した。このころに「ヘレニズム都市」としての性格をかちえていたのである。ローマ時代にはデカポリスの中で最大の都市と言われるほどであった。ユダヤ人もいたが人口の多数が「異邦人」であった。スキュトポリスと言う名前自体がこの都市の風変わりな由来を伝えている。これは、ベト・ジャンの町につけられたギリシャ語名であるが有力

な仮説によればこれは「スキュティア人の町」と言う意味である。前7世紀にスキュティア人がパレスチナに侵入してきたのだが彼らがこの場所に住んだことに由来すると言うのである。

#### (b) サマリアについて

サマリアは、北イスラエル王国の王オムリが山の上に作った要塞都市である。アッシリア支配の時代にはパレスチナ中部の中心都市とされた。この都市では、イスラエル・ユダヤ系の住民は比較的少数であった。そして前2世紀半ばユダヤで独立したユダヤ人王朝〔ハスモン王朝〕は、パレスチナ中、北部に勢力を伸ばしサマリアは侵略された。そのとき彼らはこの町を破壊して住民を奴隷として売り払った。その後ポンペイウスがローマ帝国の勢力を率いて乗り込んでユダヤの支配から切り放して自由都市にした。その後、ヘロデにサマリアは任されてユダヤとは無関係に王個人の経営に委ねられたのである。ヘロデは6000人の植民者を送り込んだ〔退役軍人以外に様々な人がいた。詳しくは不明〕。そしてこの都市は非ユダヤの拠点であったと言える。したがってこの町は、ヘレニズム、ローマ風に建設され中央にはアウグストゥスを祭る大神殿を作りこの町をアウグストゥスにちなんで「セバステ」と名付けてヘロデの死後ますますローマの町としての色彩を強めていく。

#### (c) カイサリアについて

この都市は当時のパレスチナでエルサレムと並んで最も重要な町となった。それは港があるからである。ヘロデはローマ帝国と地中海をつなぐ拠点としてこの都市を発展させローマ皇帝にちなんで「カイサリア」と名付けた。ヘロデの作った町だがまったくのヘレニズム的都市である。そしてヘロデの死後、息子のアルケラオスの短い統治期間が終わりユダヤ人がローマ帝国の直轄支配下に入るとカイサリアがローマのパレスチナ支配の拠点となる。

#### (d) ヘレニズム都市とギリシャ語

このようにしてパレスチナの中や周辺にも点々とギリシャ語を話す人々の都市が、言わば異物として存在している。周りの土地の住民はユダヤ人などであって、ユダヤ人はアラム語を話しユダヤ教という宗教文化に生きている。その中にこういう言語的、文化的異質物が存在しているのである。しかし、これらはまったく無縁の異質物というわけでない。彼らもまたギリシャ語を必要としたと思われる。なぜならエルサレムのような大きな都市はもちろん、やや小さめの都市でも、政治的、軍事的な世界権力であるこれらのヘレニズム都市としばしば直接的に接触せざるをえなかったし、日常の経済活動を行なうためにも、広域公用語たるギリシャ語を話す必要があったからである。

### 5. ギリシャ語を話すユダヤ人

パレスチナの中に、特にエルサレムなどの大都市には、ユダヤ人自身の中にもアラム語を母語とせず、ギリシャ語を第1言語として生きている人が沢山いたという事実がある。もちろんこの事実は日常生活や宗教的な生活に様々な影響を与えている。そういう彼らのことをヘレニスト〔使徒行伝6章より〕と呼んでいる。彼らの登場はエルサレムのキリスト教会の発足後まだ日の浅かった30年代半ばと想定される。

(a) ヘレニストとヘブライ人のいざこざについて

使徒行伝に書かれていることから考えるのならば彼らはユダヤ人キリスト教徒である。そして教会内で「彼らの寡婦」が食糧の分配に関してヘブライ人から差別されて紛争が生じたと言うのだから両グループの間での意志の疎通が不十分であったのは確かである。これはおそらく言語の違いが関係している。

(b) なぜヘレニストと呼ばれたのか？

ヘレニストとはギリシャ語でありギリシャ語を話す人々と言うことであろう。それであるから口語訳聖書が「ギリシャ語を使うユダヤ人」と訳したのはまずまず妥当な訳と言えよう。

(c) ヘレニストとキリスト教共同体について

主にユダヤ人の離散のゆえに、エルサレムは全世界的に重要な主要都市の1つであった。離散の民にとって、その都は帝政時代初期にも依然として祭儀の中心であった。しかしディアスポラで生活するユダヤ人の多くは、幾世代にもわたって生活してきたパレスティナ以外のいろいろな移住地における言語と文化に同化していた。このことはまたエルサレム自体にも影響を及ぼし、ユダヤ人たちはアラム語と同様ギリシャ語にも精通していた。「ヘレニスト」、すなわちギリシャ語を話すユダヤ人も、エルサレムでは決して珍しくなかった。この「ヘレニスト」のなかの1人であるステパノをここでは例としてあげてみるが、使徒行伝7・2-53の部分であるがルカによって用いられた伝承がステパノの殉教につながった迫害の発生の理由を示す可能性はある。ステパノは、モーセに対する批判、すなわち律法批判、について非難されている。そしてステパノの説教は批難の理由として神殿批判も挙げている。論争の中心はモーセの律法がキリスト者にとって有効であり続けるべきなのかどうかという問題、すなわちイエスの告知を考慮すると、まったく動機付がないわけではない問題にある。このように律法の義務から自由なキリスト教の起源は本来エルサレム共同体にあると言ってよい。しかしこの種のキリスト教がその都市で大きく前進することは不可能であった。ルカの描写によると、ステパノは訴訟手続きのためにユダヤ人の法廷につれてこられ、長い伝道説教をする機会まで与えられている。だが彼はリンチに処せられたのであって、定められた仕方で石打ちにされたのではない。そしてルカが報告するように、パウロはこの迫害に加わっていたと考えられる。なぜならその後のパウロの回心が、ダマスコ、アンティオキアにおける諸教会、すなわちステパノの迫害の結果いったんエルサレムを去ったヘレニスト達によって設立されたと思われる諸教会の存在を前提としているからである。しかし現存する情報は、ただヘレニストがエルサレムから追放されたこと、そして迫害がこうして他の場所でのキリスト教共同体の設立につながったことを述べているだけである<sup>(8)</sup>。

(d) ヘレニストはどこから来たのか？

彼らはディアスポラ出身のユダヤ人であってそれがパレスチナに里帰りしてきた、ないし一時的に滞在していたと言うことになる。そしてディアスポラはヘレニズム時代にヘレニズム諸都市に住んでいたユダヤ人集団を指す特殊な名詞として用いられていた。そして地中海世界全体の東半分〔ギリシャ語圏〕ではディアスポラの存在しない町はないと言えるくらいに彼らは広がっていた。そしてアレクサンドリアではギリシャ人に次ぐ第2の勢力はユダヤ人であった。

そして彼らはヘレニズム都市が作られるとそこに進出してきて都市の主たる経済機能である商業活動を担うようになったのである。古代資本主義が非常に発達したローマ帝国支配下においては地中海の航海を経済流通網の基盤としつつ、物質の流通が非常に盛んだった。それを特に活性化したのがローマ帝国支配であった。そして物質の流通に関する仕事にたずさわり巨大な利益を得ていたのがヘレニズム諸都市の商業階級であり、更にそれに次ぐ大きな勢力が各地のディアスポラのユダヤ人であったのだ。このユダヤ人たちはヘレニズム的都市に住んでいてそこで仕事をしている以上嫌でもギリシャ語を話さざるをえない。それが世代を重ねれば第1言語になっていく。もちろん彼らもユダヤ人であるからヘブライ語やアラム語は知っているだろう。しかし生活の第1言語はギリシャ語になっていた。だからユダヤ人といってもパレスチナに出なければ言語の通じない不自由を味わうことになるのである。

## 6. ディアスポラのユダヤ人

ディアスポラという言葉を聞くと「流浪の民」というイメージが大変強く「第1次ユダヤ戦争」の時のユダヤ人を考えがちである。しかしユダヤ人のディアスポラが出現したのは「第1次ユダヤ戦争」よりもはるか以前のことである。そして多くの場合ヘレニズム時代の初めから彼らは存在しはじめている。これは前4世紀から前3世紀のことである。そして特に前2世紀よりディアスポラのユダヤ人の人口は目立って増えている。マカバイ王朝によるユダヤ国家の隆盛の時期にディアスポラのユダヤ人人口も急速に増大していったのである。これは国家の隆盛と経済的な海外進出とが平行している。さらに、E. シューラーによるとディアスポラのユダヤ人の人口が増えた理由の1つとしてヘレニズム諸都市でユダヤ教への改宗者が増えたせいであろうと推定している。この裏づけとして改宗者〔proselytoi〕の数は前2世紀～後1世紀にかけて非常に多かった。それがディアスポラ・ユダヤ人の人口増大の原因である。ギリシャ人以外の多数の民族の出身者がヘレニズム都市で生きていくのに、支配階級たる「ギリシャ人」に成り上がることができないとすればユダヤ人になるのが最も生活しやすい道の1つだっただろう。あるいは生活のモラルという点でユダヤ人社会に引かれて改宗したものも多かろう。

次に上げられるものとしてディアスポラそのものでなされたユダヤ人口の再生産が本国〔パレスチナ〕におけるよりも大幅に上回ったと言うことが上げられる。ディアスポラのほうが経済力がはるかに大きかったのだから人口増加率も大きかった。地域によっての差は考えられるが前2世紀末にはディアスポラが成立してからすでに100年ないし200年もたっているのだから独自に人口を増やすにはすでに十分な月日が経過している。これだけの月日が経てば出発点はパレスチナからの移住者であれ異教からの改宗者であれすでに何世代かあとの子孫になっているのだ。そして古代のディアスポラのユダヤ人はローマ帝国が造り出した古代資本主義の経済状況にうまく合致して勢力を伸ばしていったのである。そして最初から異教徒に囲まれて生きてきただけにかえって自分たちの宗教的伝統を大事にしていたのである。

## 七十人訳聖書とディアスポラ

七十人訳聖書とは、しばしばラテン語のまま〔Septuaginta〕と呼ばれる。これは、「アリストテラス」の手紙の伝承によればプトレマイオス2世（在位BC 283～246）が、自分の図書館の館長ファレロンのデメトリオスの忠告を入れて、王立図書館に入れるために、エルサレムか



ら呼び寄せた72名の翻訳者に委託して行なわせたもので、ファロス島で着手され、72日後に完成したと言う。この「Septuaginta」はラテン語で70の意味の数詞で翻訳者派72人であるがこの72という数がいつの間にか70というきりのいい数に変えられたと一般に説明されている<sup>(9)</sup>。この「七十人訳聖書」は先祖代々の言葉にうとくなくなったヘレニズム世界のディアスポラ・ユダヤ人の礼拝上の必要から成立したものとして、また、周囲の異邦人異教徒に自家の宗教の内容を広く伝えるため、あるいは、ユダヤ教信仰の自由を認めさせるためなどが挙げられる<sup>(10)</sup>。内容としては最初にモーセの律法が翻訳され、次に預言書、そして最後に諸書という順にギリシャ語で訳され、なおかつヘブル語旧約聖書にはない外典が入っている。外典には、第1エズラ書、ユディト書、トビト書、マカベア書、ベン・シラの知恵、ソロモンの知恵、マナセの祈り、バルク書、エレミヤの手紙、エステル記への付加、ダニエル書への付加がある。七十人訳はギリシャ語を話すユダヤ人にとっては聖なる啓示の言葉となったが、それがどういう形で礼拝に用いられたかはいまだに明らかでない<sup>(11)</sup>。この七十人訳聖書を媒介として多数の異邦人がユダヤ教に改宗したりしたのはこのヘレニズム時代の特徴である<sup>(12)</sup>。結局、初代キリスト教はこれら改宗者達を手がかりとしてローマ世界に広がっていったが、その過程を通じて七十人訳聖書はキリスト教会の聖典になった<sup>(13)</sup>。

#### 7. エルサレムに里帰りしたディアスポラのユダヤ人について

1世紀当時一般にパレスチナにはヘレニズム的ユダヤ人がかなり多数住んでいた、もしくは長期間滞在していたと考えられる。その中からキリスト教に改宗するものが相当数出現したと言うことであろう。しかしこの事実は最初期のキリスト教を知るために非常に重要な事実である。第1に初期キリスト教はユダヤ人の中でも特にヘレニズム的ユダヤ人を引きつける要素を持っていたと言うことと、第2に生まれだてのキリスト教にすでにギリシャ語が導入されていたと言うことである。

#### 第1の点について

最初期のキリスト教についてはその思想と全容が明らかでない以上断片的に知られていることから推測する以外にないが、おそらく最も重要な要素の1つが神殿批判であったろうと思われる。ディアスポラのユダヤ教はこの思想は別としてその現実的実体としてはもはや神殿を必要としない宗教となっていた。その理由として、ディアスポラでユダヤ教信仰を保つていこうとすれば神殿ナシで宗教活動をする意外方法がなかった点が上げられる。そのユダヤ教は必然的に律法の学習を中心として、その上にヘレニズム世界全体に通じる思想を構成するものとなった。こういう事情からしてディアスポラ出身のユダヤ人の中には神殿宗教と言うものに対してかなり厳しい批判を持つものが相当数存在したと考えられる。そして彼らはディアスポラからパレスチナに出てきてキリスト教徒の存在を知りキリスト教徒が崇めているイエスという人物が非常に鋭く根本的な神殿批判者、ユダヤ教批判者であったことを知ってそれに共鳴して自分たちもキリスト教徒になったのではないだろうか。だから彼らのキリスト教は、彼ら自身がディアスポラのユダヤ教出身であるだけに、厳しいユダヤ教批判を中心としていた。ユダヤ教がいかにかへレニズム世界に通用する宗教たらんとしても、やはりそこには無理があるのですべての人々に通ずる宗教を目指すとき、おのずとユダヤ教批判に向かっていたのであろう。だから彼らはまだ多くの点でユダヤ教の伝統の中にとどまり、神殿崇拜とも結びついていた12

使徒のキリスト教よりも、よほど明白にユダヤ教批判を打ち出していたものと考えられる。だからこそまず彼らがエルサレムのユダヤ教支配層による弾圧の対象となったのでありまた彼らの弾圧に際して12使徒グループのほうは彼らと同調することを避け、ぬえ的行動をとってエルサレムで生き続けようとしたのである。しかし、以後ヘレニズム・ローマ世界にキリスト教を広めていったのは主としてこの流れである。パウロがキリスト教に共鳴して改宗したのも、彼らのラディカルなユダヤ教批判という点で共鳴したからであろう。

## 第2の点について

彼らが生まれたたてのキリスト教にギリシャ語を導入したことはキリスト教というものの以後の運命を決定する要因でもある。キリスト教をギリシャ語の宗教として育てていったのがヘレニスト出身の人々であった。当時のローマ帝国支配下の世界で彼らのすべてではないがちょっとした経済人であった。そして彼らは同時に相当な知識人であった。だから彼らはユダヤ教の批判的克服としてのキリスト教を構成することに熱心であり、しかもそれは理論的にもかなり高い水準のものであった。

## Ⅲ. 地中海世界の言語状況

ローマ帝国支配下の地中海世界の東半分は「ヘレニズム世界」であった。そしてこの世界におけるギリシャ語の位置はギリシャ本土を別とすれば、それぞれの土地の人間はそれぞれの土地の言語を話して生きていたのでギリシャ語はその上に覆い被さってくる支配の言語に過ぎないのである。

### 1. 小アジア地方の言語状況について

ミュシア、イサウリア、リュカオニア、カッパドキア、フリュギア、ピテュニア、ガラティアの諸地方は、他との交流のためにギリシャ語を用いることがあっても自分たちの生活は自分たちの言語で営み続けていたと言う事実がある。

### 結論として

キリスト教がギリシャ語の世界で普及したのは、決してすべての人がギリシャ語で生活しているところにギリシャ語の宗教たるキリスト教が出現したからそれで普及したと言うようなことではない。むしろ逆に、ヘレニズム世界のキリスト教は諸民族の間に散らばって存在していた。ヘレニズム都市にのみ、まず普及していき、そのキリスト教が少なくとも正当派のキリスト教徒の言語政策としてギリシャ語に固執したからいつまでも都市にとどまっていた、農村へはなかなか普及しなかったのである。このことを以下の都市の例を踏まえながら見ていくことにする。

### 2. 地中海近くの小アジアの各地方の言語状況について

#### (a) リュカオニアについて

リュカオニアは小アジアの内陸部でガラティア地方と地中海岸地方〔パンフリア〕の間に挟まれた地域である。パウロがバルナバにつれられてこの地方で伝道旅行〔第1回伝道旅行〕をして歩いていた時のことである。リュストラの町で、1人の「足なえ」を奇跡的に治療した。

パウロ他、初期のキリスト教の伝道者はこの種の新興宗教の常として、しばしば奇跡的治療を試みていたのだ。それが時に「成功」するので人気を博することになる。加えてパウロは流暢にギリシャ語をまくしたてて説教したから、人々は、これは神の化身ではないかとびっくりした。バルナバは黙っているからゼウスで、パウロはおしゃべりだから、ゼウスの意思の伝えてであるヘルメスだろうというのだ。「群衆はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、リュカオニアの地方語で、『神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ』と言った」〔使徒行伝14・11〕という言葉だが、当時の世界においてギリシャ語を話すことが当たり前でなかったことを示す重要な実例の1つなのである。バルナバとパウロがここで遭遇した事態は、自分たちが相手にしているのはリュカオニア語を話す人たちだった、と言うことである。リュストラも1つの都市だが、内陸部の小さな町だから、ヘレニズム化はあまり進んでいなかったのだろう。住民は自分たち同士ではリュカオニア語を話していた。と言うよりもギリシャ語をわかる人間がどの程度いたかも定かではない。他方、パウロはむしろリュカオニア語を知らない。それにもかかわらず、そこに乗り込んでいって、人間がギリシャ語を話すのは当然であるかのごとく、ギリシャ語でまくしたてた。こういう情景を考えると、パウロという人物のキリスト教がどういうものであったか、具体的なイメージがかなりはっきりつかめてくると言うものだ。パウロは特に、相手がギリシャ語を理解するのは当然だと思っていて、だから、ギリシャ語を母語としない人たちがパウロの言ったことをパウロの言った通りに正確に理解しないと、この馬鹿ものめ、とののしる〔ガラティア3・1〕。住民に理解を求めるのならば自分でガラティア語なりリュカオニア語なりを学べば良いものをそういう努力をしたほうが良いと言う可能性にすら思い至らない。そういう意味ではパウロは典型的にヘレニズム的文化帝国主義の権化であった。

#### (b) カップドキア

小アジアの内陸部のカップドキアはリュカオニアよりも更に東部に位置し、第1ペテロ書がいつ書かれたのか分からないが、1世紀末とすると、その頃の小アジアでキリスト教徒の多かった土地の1つとしてカップドキアがあげられている。4世紀になると、次から次へとギリシャ語のキリスト教会をリードする優れた神学者を生み出した。例えば、ニッサのグレゴリオス、ナジアンゾスのグレゴリオスやバシリオス達がそうである。ニッサのグレゴリオスは彼自身はギリシャ語で著作するギリシャ語文化人であるが、「天」という単語についてギリシャ語でウーラノス〔ouranos〕と呼ぶが、ヘブライ人はサマティム〔samathim〕、ローマ人はケルム〔caelum〕と、また、シリア人、メディア人、カップドキア人、マウレタニア人、スキュティア人、トラキア人、エジプト人のそれぞれが異なった仕方と呼ぶと彼は述べている。「天」という、キリスト教教義にとって重要な1つの概念のことであるから、これらの土地のキリスト教徒は、4世紀においても、キリスト教教義を考えるのに、それぞれ自分の言語で考えていた、と言うことだろう。また、バシリオスも自分の土地の言語としてカップドキア語に言及している。

#### (c) フリュギア、ガラティア

これは、新約聖書にもしばしば登場する2つの地方で、多くは「ガラティア、フリュギア地方」と、対になって出てくる。ローマ帝国支配がこの2つをまとめて1つの行政区画としたせ

いである。しかし、歴史的にはその住民はずいぶん異なる。フリュギア人はおそらく紀元前2000年期にはすでにこの土地に住んでいた。彼らは、インド・ヨーロッパ語系の民族であり、トラキアから移住したと言われている。それに対してガラティア人は、歴史の尺度を長くとれば、この土地ではまだまだ新参者である。フリュギアについては、教会史家ソクラテスに出てきている例を挙げるならば、彼は5世紀前半にコンスタンティノポリスで活躍し、7巻にわたる『教会史』を書き残している。彼はそこでセリナス〔selinas〕というアリウス派の司教に言及している。この司教の父親はゴート人で、母親はフリュギア人があった。そこで彼は、「そのどちらの言葉でも教会について教えることができた」。なお、フリュギア地方には後386年以降ゴート人がかなりな人数で移住してきているという。つまり、新参者のゴート人が地元のフリュギア人の女性と結婚した結果、息子はゴート語もフリュギア語もできた、ということだろう。他方ガラティアについては、ヒエロニムスの有名な証言がある。ガラティア人は「トレーブ人とはほとんど同じ言葉を持っている」と言うのである。すなわち今日のトリーアの住民である。古代においてはトレーブの住民はケルト人であった。ケルト人の町と小アジアの高原の「ガラティア」とではあまりに遠い話ではないかと思われるかも知れないが、実は「ケルト」と「ガラト」はもともと同じ語である。GLTはKLTのKが、ギリシャ語風になまったものにすぎない。つまり「ガラト人」とは、ケルト人の一部が民族移動を起こし、前3世紀の末に、後に彼らの名前をとってガラティア地方と呼ばれるようになった地方に定住したのである。今日のアンカラを中心とした高原地帯である。したがって彼らがケルト語を話したとしても当然のことである。ヒエロニムスがケルト人の中でも特にトレーブ人を引き合いにだしたのは彼自身トレーブに行ったことがあるから自分の知っている土地を引き合いにだしたと言うことであろう。この証言により5世紀になってもまだガラティア人はケルト語を話していた、と言うことがわかる。

#### (d) ミシュア

小アジアでは、最も西方に位置し、ヘレスポントスの海峡をはさんで、ヨーロッパ側〔トラキア〕とむかいあっている。ここは、6世紀にまだミシュア語が話されていた。6世紀に書かれたVita Auxentiitという伝記であるが、伝記の著者は、アウクセンティウスの弟子なる人物の証言を引き合いにだしているのだが、この人物は著者によれば「ミシュア出身で言語においてはバルバロスであったが知性においてはすばらしい」という。この伝記の著者は、内容からして当然ギリシャ系の文化人であっただろう。ギリシャ語以外の言葉を「バルバロス〔野蛮〕」と呼んでいるのだから、この場合のバルバロスがミシュア語を指すことは明確である。

#### (e) イサウリア

イサウリアは小アジア南部の地中海岸の近い場所に位置している。ここにも奇跡行為者シュメオンの伝記が残っており、彼に、眼病を直してもらった人物が、物乞いに会い、憐れんで、シュメオンの名前を唱えると、彼の通風は直って普通に歩けるようになった。「人々はここに生じた奇跡を見て、一緒になって自分たちの言語で声を上げた」。イサウリア人と言うのは、優れた建築技術者が多く、あちこちの町に招かれて仕事をするのが多かった。つまり自分の故郷にとどまって一生その外にでないなどと言うのではなく、あちこちのヘレニズム都市に出ていって仕事をしているのであるが、そういう人たちが大勢いたにもかかわらず、彼らもや

はり、自分たちの故郷ではイサウリア語を保ち続けたのである。

### 3. 地中海の都市とキリスト教の関係

以上のような例からこれらの地中海の都市でキリスト教はどうなったかということ以下4つの観点から見ていきたい。

(a) 布教の仕方について

(b) キリスト教を宗教として受け入れ、キリスト教徒になったのか？

(c) ローマ帝国でのキリスト教公認とその影響

(d) イスラーム支配の影響について

(a) 布教の仕方について

布教の方法として、パウロ達宣教師と呼ばれた人々が、地中海地域の小都市および農村を旅行しながらキリスト教を広めていった。有名なものとしては、第1回から第3回までのパウロ達による伝道旅行と呼ばれるキリスト教の教えを説いてあちこちを歩いた記録がある。しかし宣教師達はヘレニズム都市から来ており、主にギリシャ語で教えを説いたために、地中海地域の小都市および農村は、ヘレニズム都市に比べてキリスト教の宣教に大変時間がかかった。

(b) キリスト教を宗教として受け入れ、キリスト教徒になったのか？

まず上流階級である、貴族や富者は、キリスト教に改宗するものは少なかった。それは、上流階級の人々は、一般民衆の興味を持たない哲学などの書物に親しんでおり、ストア哲学が流行していた。マルクス・アウレリウスはその1つの例だが、ストア哲学は人の心を平静にコントロールすることを理想としたからキリスト教の論理を超える信仰の決断や、熱心さなどは受け入れにくかったであろう。上流階級の人々は、民衆への配慮を義務としながら、民衆そのものを軽蔑していたから、キリスト教徒が中下層の多い状況では彼らの興味をひきにくいということもあった。中下層の人々もキリスト教と言うものをギリシャ語で理解しようとしたので、知識のある人は別として、珍しい宗教程度でしか受け取られていなかった<sup>(14)</sup>。しかし313年にミラノ寛容令がでる。これはコンスタンティヌス1世とリキニウス帝とが、ミラノで会見した際、キリスト教徒達の信教の自由を保障するために両者連名で発布したと伝えられる<sup>(15)</sup>。そしてこの年を境に聖書の翻訳がなされるようになり次第に自分たちの言語でキリスト教の理解が可能になっていった。

(c) ローマ帝国でのキリスト教公認とその影響

先に述べた「ミラノ寛容令」が出るまえの地中海都市でキリスト教に改宗した人々は、異教徒であると言うことで迫害を受けた。迫害の後「ミラノ寛容令」が出たおかげで、キリスト教徒達は他の宗教とまったく同一の信教の自由が保障された。その後392年にキリスト教は、テオドシウス帝がローマ帝国において国教とすることを認めた<sup>(16)</sup>。

(d) イスラーム支配の影響について

7世紀になると、イスラーム勢力が、地中海地域に侵入してくる。イスラーム人は、アラーを唯一神とするコーランの教えをキリスト教徒であろうとなかろうと強制する。このためにキ

リスト教は、影を潜めることになるのである。

## 結論

後1世紀パレスチナにおけるユダヤ民族の言語は、アラム語とヘブライ語であった。ヘブライ語は、神聖文学のため理解が難しかったので日常語としてアラム語を使用していた。しかし前1世紀半ばになるとパレスチナをふくむ地中海世界の東半分は、ローマ支配の時代をむかえヘレニズム都市が発展する。そしてローマ帝国は広大な領地を統治するために広域共通語である「ギリシャ語」を使用する。このギリシャ語の影響はユダヤ民族に宗教、生活の面で様々な影響を及ぼす。そしてキリスト教もヘレニズム・ローマ時代において教えを広めたかったのでギリシャ語で布教された。しかしキリスト教は、ギリシャ語で布教したため結果としてヘレニズム都市以外の小都市や農村にはなかなか広まらなかったのである。

## 註

- (1) 本稿は田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房1997に多く負っている。
- (2) 高尾利数『キリスト教を知る事典』東京堂出版1996、p.24。
- (3) 前掲書p.37。
- (4) 下中弘『世界大百科事典』2 平凡社1998、p.110。
- (5) 前掲書p.110。
- (6) 『キリスト教を知る事典』p.36。
- (7) 『世界大百科事典』2 p.110。
- (8) H・ケスター『新しい新約聖書概説・下』新地書房1990、p.135~137。
- (9) 中村義治『旧約・新約聖書大事典』教文館1989、p.549。
- (10) 土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』日本基督教団出版局1994、p.62。
- (11) 『旧約・新約聖書大事典』p.549。
- (12) 石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社1988、p.218。
- (13) 『旧約・新約聖書大事典』p.549。
- (14) 松本宣郎『ガリラヤからローマへ』山川出版社1994、p.115~116。
- (15) 中村義治『キリスト教大事典』教文館1988、p.1039~1040。
- (16) 『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局1996、p.922。

## 参考文献一覧

- 荒井章三『カラー版聖書大事典』大日本製本株式会社、1991  
浅香正、他『世界歴史2／地中海世界II』岩波書店、1969  
石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社、1988  
宇田進『新キリスト教事典』いのちのことば社、1991  
高尾利数『キリスト教を知る事典』東京堂出版、1996  
小高民雄『カラーイラスト世界の生活史24、イエス・キリストの時代』東京書籍株式会社、1989  
霜田美樹雄『キリスト教はなぜにしてローマに広まったか』早稲田大学出版部、1987  
下中弘『世界大百科事典・2』平凡社、1998  
鈴木荘夫『言語11月号第26巻、第12号』大修館書房、1997  
田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997  
月本昭夫『目で見る聖書の時代』日本基督教団出版局、1994

土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』日本基督教団出版局、1994  
長窪専三『ユダヤ教とヘレニズム』日本基督教団出版局、1983  
中村義治『キリスト教大事典』教文館、1988  
中村義治『旧約・新約聖書大事典』教文館、1989  
H・ケスター『新しい新約聖書概説・上』新地書房、1989  
H・ケスター『新しい新約聖書概説・下』新地書房、1990  
松本宣郎『ガリラヤからローマへ』山川出版社、1994  
『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、1996